

資料 4

不登校児童生徒への支援について 一ひとみ学舎の取り組みに基づいて一

文責：一般社団法人ひとみ学舎
代表理事 居上公美子

1. ひとみ学舎の取り組みについて（2015.4.～2025.4 現在）

（1）一般社団法人ひとみ学舎の活動目的

既存の社会の中で生きづらさを感じている子どもや大人に対して、彼らが自分の特性に気付き、それをいかして他者と一緒に自分らしく生きていくための支援をすることを主たる目的とする。

（2）一般社団法人ひとみ学舎の事業

- ① 学齢期の子どもたちの学びや居場所づくりを支援するための事業 → 「昼間のひとみ学舎」・「居場所の会」
- ② ソーシャルスキルトレーニングに関する事業 → 「デコボコポン」
- ③ 相談事業
- ④ 研究および研修に関する事業 → 「親いもの会」
- ⑤ 地域社会での自立に向けた支援に関する事業
- ⑥ 前各号に付帯または関連する事業

（3）事業の成果

① 利用者数

2020年度以降の利用者数は次のとおりである。

表1 2020年度以降の利用者数の推移

	昼間のひとみ学舎		デコボコポン・相談		居場所の会		親いもの会	
	開催日数	延べ参加人数	開催日数	延べ参加人数	開催日数	延べ参加人数	開催日数	延べ参加人数
2020年度	145	556	72	141	9	58	中止	中止
2021年度	180	728	71	107	11	101	8	81
2022年度	169	806	42	88	18	146	9	65
2023年度	165	802	43	87	18	127	5	82
2024年度	161	761	174	233	36	172	22	288

② 長期にわたるこども支援

2か月間という短期の関りの子どももいるが、同時に10年以上関わり続けているこどももいる。1年以上かかわるこどもは、平均約6年である。学校卒業後、地域で働くところまで関わり続けているこどももいる。30歳までは見守っていくつもりでかかわっている。

- ③ 家族を含めた支援
- ④ 様々な形態による支援
- ⑤ 学校・専門機関との連携
- ⑥ 開かれた支援体制の構築

（4）実践より見えてきた特性・課題

① こどもの特性・課題→関係性における特性・課題

ひとみ学舎を利用しているいわゆる「不登校児童生徒」には、人・モノ・コト（環境）との関係性に特性や課題があることが多い。関係性は、人・モノ・コト（環境）と言葉や行動感情などのコミュニケーションを通じて相互作用をし続けることによってつくられるものであるから、相互作用をする力を育てていく必要がある。そこで、相互作用する過程を①自分や自分を取り巻く他なるものをできる限り正確に把握する、②判断・思考する、③表現するに分解して子どもからの表現を受け止め、この過程のどこに特性があるのか、課題があるのかを見つけて支持したり、修正案を一緒に考えたりして、①～③がスムーズに行えるように繰り返し練習することに取り組んできた。この相互作用する力はとりもなおさず社会で「生きてゆく力」として理解している。

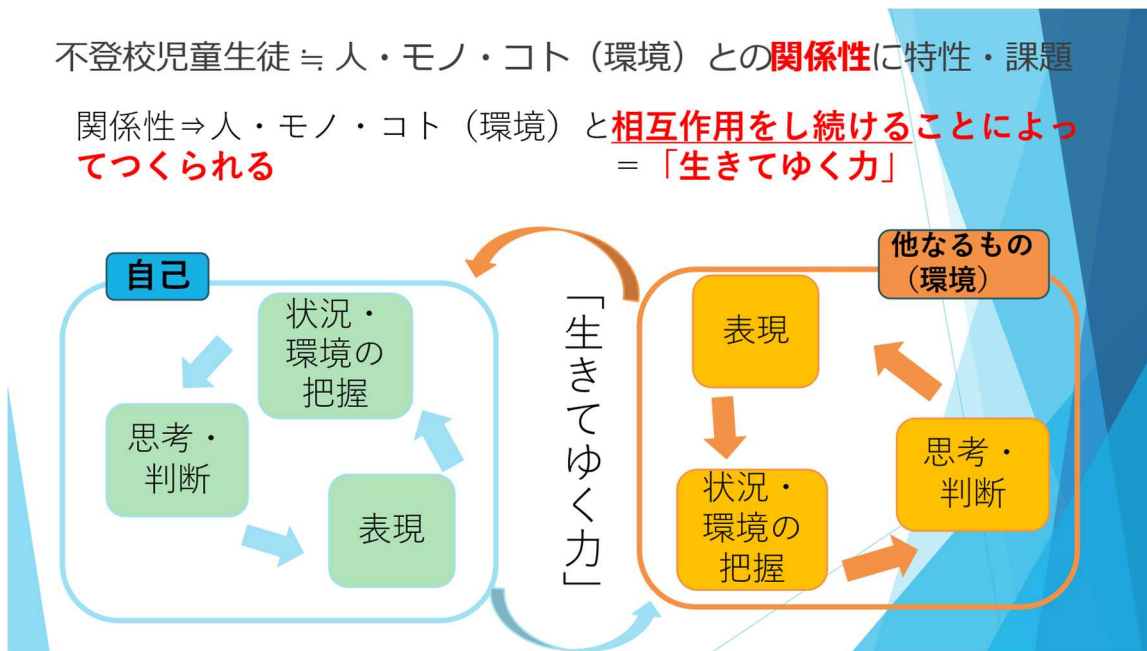


図1 人・モノコトとの関係性のイメージ図

② 保護者（こどもの育ちに関わる人たちへの）支援の必要性

※ 子どもが「不登校」になった直後

学校に行かなくなると、「この子はどうなっていくのだろう」、「どう育てていけばよいのだろう」と育てる方向性を見失い不安になる。同時に、「私の育て方が間違っていたのではないか」と自分に十進がなくなる。

子どもが学校に行かなくなった途端、これまでつながっていたママたちとも話す内容が違ってくる。何を話してよいかわからなくなる。相談する人がいなくなる気がする。

旦那さんや、保護者の親世代との価値観の違いを突き付けられて、途端にうまくいなくなる。

※ 落ち着いてくると

この子をどう育てていったらよいのか、育てる指針を探したい。学びたい。

⇒「親いもの会」「徳島に学びの多様化学校の設定を！ 座談会」

2. 徳島に学びの多様化学校の設立を！座談会（以下「座談会」と称す）について(2024.10～2025.4 現在)

(1) 「座談会」開催の背景

徳島県内でも不登校児童生徒が年々増加しています。不登校の子どもたちにとって、よりよい学びの内容や方法、場は、どのようなものなのでしょうか。子どもたちに大人たちが支援できることは、どのようなことでしょうか。大人がみんなで膝を突き合わせて、本気で話し合ってみることで、よりよいありようが見つけられるかもしれません。多様な立場の、多様な見方、考え方をを持った大人たちが寄り集まって話をするのが、不登校の子どもたち、そしてすべての子どもたちの、より豊かな育ちに繋がると考えて、座談会を開催することとしました。

(2) 「座談会」開催の実際

「座談会」は次のように実施された。(今後実施予定のものも含む)

図2 「座談会」開催記録

回	日時	開催場所	参加人数	テーマ
プレ	2024/10/5 14:00～16:30	一般社団法人 ひとみ学舎	4名	座談会について/不登校の子ども親/既存の普通学級・特別支援学級・特別支援学校・教育支援センターについて/学校に期待すること
第1回	2024/11/30 19:00～21:00	一般社団法人 ひとみ学舎	14名	話し合ってみよう！ 徳島に学びの多様化学校を創るとしたら、どんな学校があったらいい？ などなど・・・
第2回	2024/12/22 13:30～15:30	一般社団法人 ひとみ学舎	12名	話し合ってみよう！ 学校に行きづらい子どもってどんな子ども？ そんな子ども達が学ぶにはどんな学校だったらい？ などなど・・・
第3回	2025/1/19 13:30～15:30	とくぎん トモニプラザ	11名 (内2名学生)	子どもに身につけてほしいチカラってどんなチカラ？
第4回	2025/2/16 18:30～20:30	とくぎん トモニプラザ	17名 (内3名学生)	子どもに身につけてほしいチカラを育てるための【手だて】とは？
第5回	2025/3/22 13:30～15:30	徳島県民活動 プラザ	11名	バーチャル学びの多様化学校 時間割・教室・環境・授業など具体的に考えてみよう！パート1
第6回	2025/4/26 13:30～15:30	徳島県民活動 プラザ	20名 (内4名学生)	バーチャル学びの多様化学校 先生の採用条件・評価・楽しい学校とはなど具体的に考えてみよう！パート2
第7回	2025/5/24 14:30～16:30	徳島県民活動 プラザ		これまでに話し合われたことをもとに、学びの多様化学校の設立に向けた提言書をつくろう

※「座談会」参加者は、保護者、教員、公務員（行政関係者）、子どもの居場所主催者、医療関係者、議員、大学院生等多岐にわたる。

(3) 「座談会」の成果

※各回の意見交換の内容については、別紙0～5 参照

3. 学びの多様化学校に期待すること

(1) 学びの多様化学校の必要性

① 子どもの学ぶ権利の保障という視点から

※ひとみ学舎に通っていたこども（当時中学生）や座談会に出席したこども達（現在ひとみ学舎に通っている中学生・ひとみ学舎を卒業して公立高校に通っている高校生）の話から一部抜粋

座談会に出席していたB君が話してくれた。「僕は中2で九九を勉強した。九九で僕の世界は変わった。そのあと勉強した一次関数では世界は変わらんかったけどな。」「漢字や文字もかけたほうが便利だと思う。あんまり漢字は書けんけどな。」

A 君がひとみ学舎で農業体験をして、それをもとに自己推薦資料を作って農業高校を受験した。受験勉強もひとみ学舎で頑張って、受験に合格した。受験後、「学校には行かなかったけれど、ひとみ学舎で活動をしたり、勉強をしたりしてよく頑張ったね。学校に行ってもいかなくても関係なかったよね。」と話をした。すると彼は、「それは違う。僕は中学校にはいなかったんだよ。中学校ですべきことは置いてきたんだよ。」と話してくれた。

座談会で C 君が話してくれた。高校に行って、学びたいことができた。僕は音楽が好きで、音楽の時間アコギを弾かせてくれてうれしかったし、僕の式な音楽の話がみんなにできてうれしかった。他にも、エクセルやワードがもっと上手に使えたり、ソフトをワンランク上で使えたりするようになりたいから情報の授業は、友達がいなくても授業が楽しい。

こどもたちは、誰もがより良く生きたいと願っています。学びたいと思っています。自分が知らないコトとどのように出会っていけばよいのかを知らないだけなのではないかと思われるのです。また、こどもたちはいわゆる「学校」に行きたいと思っています。「学校」にいけない自分はどこかダメな自分ではないかと思ったり、「学校」にいている友達はどうやましいと思ったりしています。ほかの場所で頑張ることはできるけれど、やはり「学校」とは違うのです。

② 保護者の「義務教育を受けさせる義務」という視点から

※ひとみ学舎にこどもが通っている保護者の方の話から一部抜粋

こどもが学校に行かなくなると、落ち着いてきます。こどものことも「〇〇が苦手なようだ」とか「〇〇は得意なようだ」とか少しずつこどもの様子が見えるようになってきます。すると、社会に参画できるようになってほしい、自立できるようになってほしいと思います。そのためには、どうすればいいかわからないので、この子を育てるアドバイスがだれかにもraitたいです。教育のプロである先生に教えてほしいです。

こどもが学校に行っているときは何も思いませんでした。学校に任せておけばいいと思っていました。学校に任せていたと思います。でも、こどもが不登校になってからは一緒に育てていきたいし、いつてほしいと思います。家庭ではできない客観的な目で子どもを見たり社会性を育てたりしてほしいです。

様々な能力にばらつきがあるこども（突出した能力があったりへこんでいる能力があったりする）に対して、へこんでいる部分をどう理解してどう対処したらいいのか、あるいは突出している能力をどう育てていったらいいのか等具体的な方法の相談にのってほしいです。

保護者は、多くの子どもを育てた経験を持っている学校の先生のプロ性を認めています。だから、子どもを育てる相談に乗ってほしいと思っています。学校、先生と一緒にこども達を社会で自立できるように育てていきたいと思っています。

③ 子どもの学校教育における学びの保証という視点から

学びの多様化学校の対象者は、普通学級に在籍している児童生徒の中で、大集団・一斉授業への適応力が低く、個別の教育の必要度が高いこども達である。次の図は学びの多様化学校の対象児のイメージ図である。

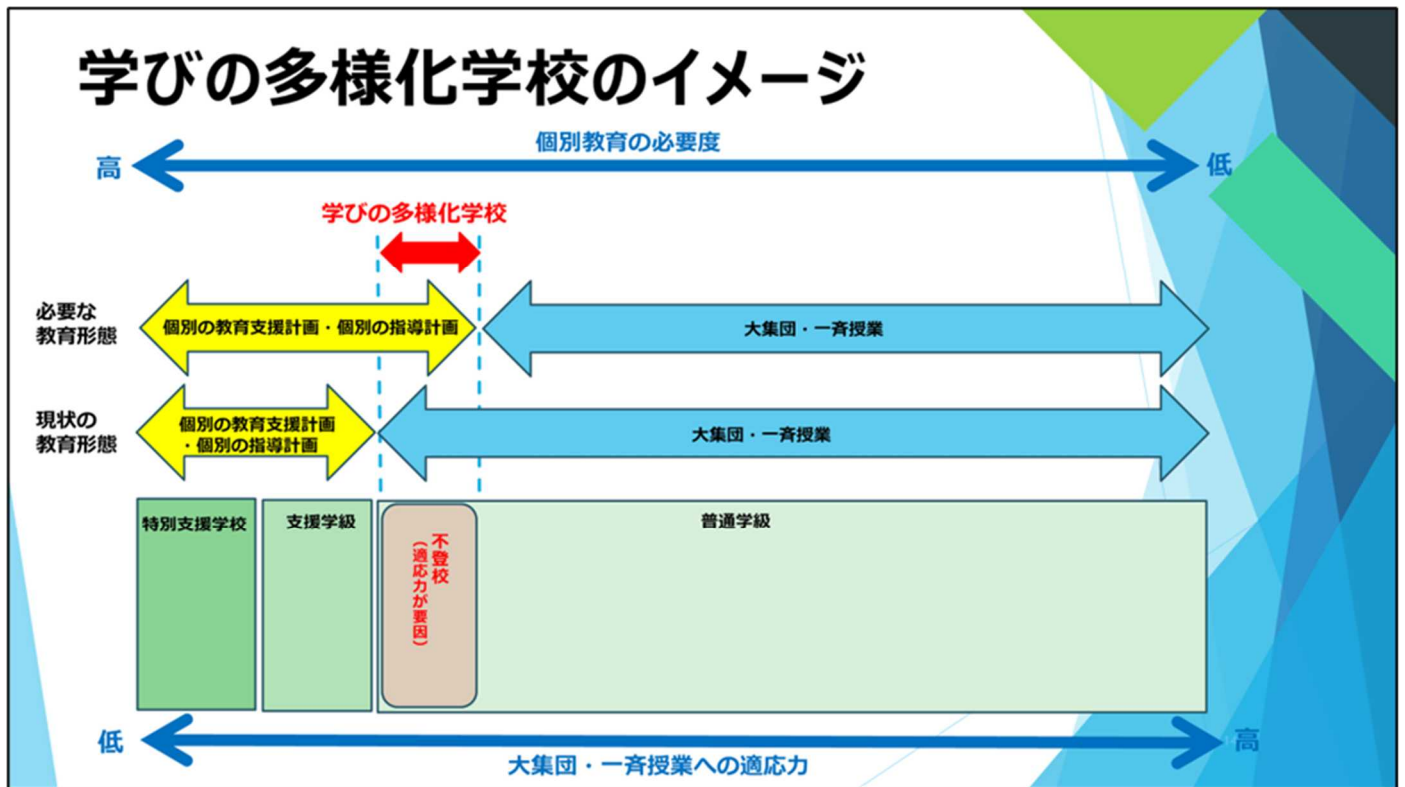


図2 学びの多様化学校の対象児のイメージ

※徳島県にこどもの「居場所」が増えてきた。これは大変素晴らしいことだと思われる。だからこそ、「居場所」の役割と「学校」の役割をみなおさなければならないのではないだろうか。民間の「居場所」だからこそ、できることがあるし、「学校」だからこそできることがある。

※民間の「居場所」は、教育の主たる権利を持つ「学校」の補助機関というのが個人的見解である。こどもの教育をコーディネートするのは学校の先生の役割ではないだろうか。

(2) 学びの多様化学校に期待すること

- ① 目標：一人一人のこどもが社会で自立するために必要な知識・技能 ひと・もの・こととの豊かな関わり・自己理解・自己表現の力を育てる。
- ② 「個」を重視した（に応じた）教育の場であること。
- ③ 人（友達、スタッフ）、モノ、コトと関わる力を育てる。
- ④ 学ぶ過程を重視する。
- ⑤ 学習のモチベーションとして、need、want を重視する。多様な生き方、働き方が認識されるようになった現代において、子ども達に従来の高学歴を目標とする価値観とは異なる学習の必要性の説明ができる。
- ⑥ 仲間と一緒に活動したり、個別に活動したりすることをバランスよく配置する。
- ⑦ 子ども達が、所属感や安心感を得られる場である。
- ⑧ 変化し続けるシステムであること。
- ⑨ 教師と子どもとのかかわり方

学びの多様化学校のありようについてひとみ学舎に中学生から通っている D 君と一緒に生活作文を書いた。その時 D 君が話してくれた内容の中に示唆があるように思われる。

僕が通っている通信制高校の先生は、これまでに会った小中学校の先生とは全く違う。僕は高校で不安になることがよくある。例えば、授業後の教室移動があるとき、全く分からないわけではないが、「ここでもいいのかな」とよく思う。全く分からないわけではないので先生に尋ねるのはどうかと思う（もともと話しかけるのは苦手だから余計だ）。でも不安だという気持ちはある。そんな時先生が話しかけてくれる。「〇〇君、どこに行こうと思っとな？」僕が「〇〇です。」と答えると、「そうなん。行ってきなよ。」と言ってくれる。小中学校だったら、「わからんだろ、あかんなあ、ほな教えたるわ」という感じで教えられるような気がしていた。僕はダメな子だといわれ続けているような気がしていた。

中学校の時はテストに向けてみんなの緊張が増ましになる。だから僕の緊張も増ましになる。つらかった。僕は、僕なりにだけ一生懸命勉強した。でも、テストの点は少しもよくならなかった。順位もついて、いつも僕は「お前は馬鹿だ」と言われているような気がして嫌だった。通信制高校にいったら、課題が出されていつまでに何をしたらよいかははっきりした。僕のペースで課題に取り組むことができる。頑張ったら頑張っただけ先生が評価をしてくれる。間違いははっきりと直してくれる。テストにでる範囲がはっきりわかるのでテスト勉強をしようという気になる。中学校ではしたことはなかった。

これまでならできないと思ってやってこなかったことも今ならできるような気がしている。やってみようと思うことが増えてきた。

※これまでの「座談会」を基にして学びの多様化学校を図にして次に示した。

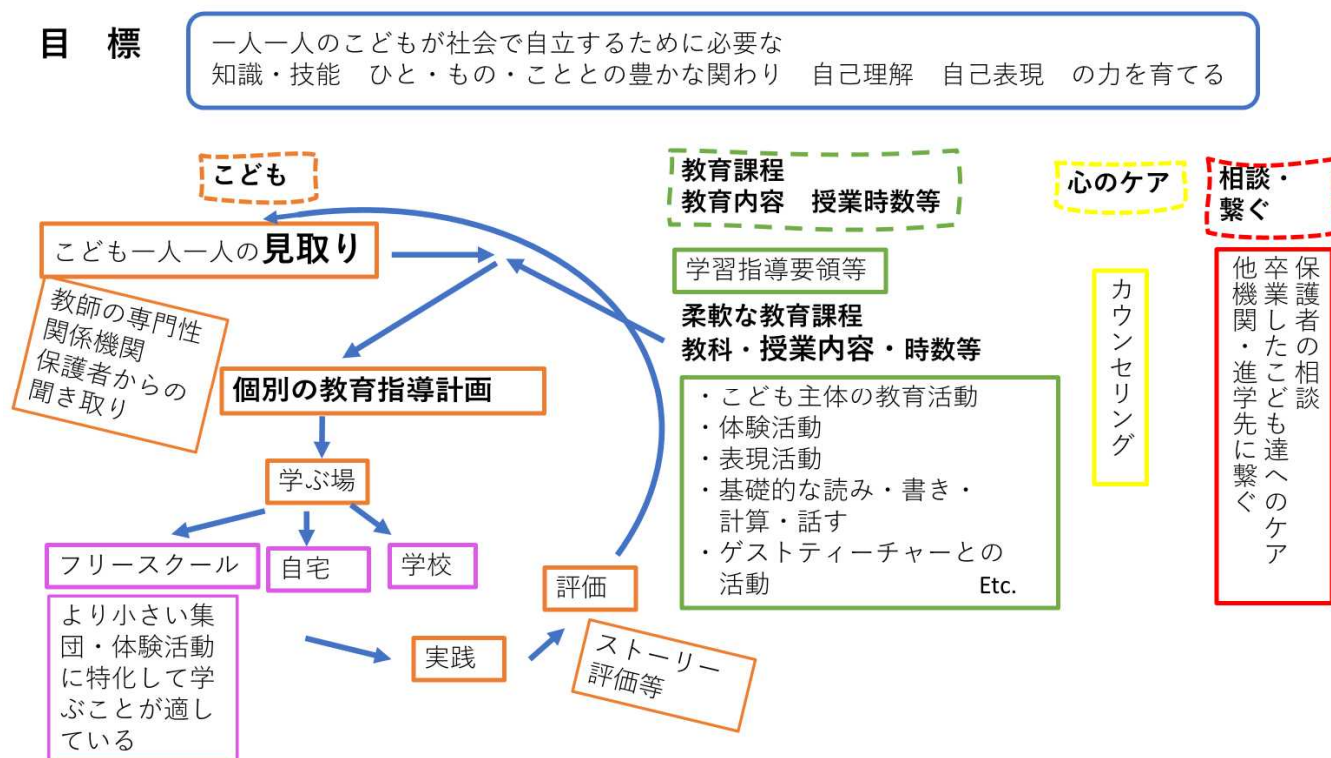


図3 学びの多様化学校のイメージ